

広島・尾道遺跡 (CC03地点)

1 所在地 広島県尾道市土堂二丁目

2 調査期間 一九八二年(昭57)二月～一九八三年(昭58)二月

3 発掘機関 尾道市教育委員会

4 調査担当者 森重彰文

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 鎌倉時代～現代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

尾道遺跡は、現在人口一〇万余を抱える尾道市の中心部地下約三～四mに及んで埋蔵される市街地遺跡として約三七haの広がりを見定している。



(尾道)

尾道は、県東部に位置してその遠浅肥沃な海域を背景に原始・古代を通じて繁栄した松永湾域にあって、潮の干満に伴い西の流出入域に位置する。対岸約〇・四kmの向島との間を天然の良港として発展してきた。

瀬戸内航行に係る核としての商業港湾都市としての萌芽は、鎌倉時代を遡り、嘉応元年(一一六九)後白河院庁より太田庄(現広島県世羅郡一帯)の倉敷地の指定を受けたことに始まる。すでに鎌倉時代末期には人口五千を超える都市に成長していたことなどが文献の上でも確められている。調査は、一九七五年第一次として、七七年より国、県の補助金を得て継続的に実施している。尾道は、背後より低丘陵状の三山に追われて、幅数百m、長さ約四kmの東西に細長いわずかな平地と緩傾斜地上に占地して、三山の間に小さな奥行を抱く。木簡の出土地点は、西のこの小さな湾入を臨んだであろう天寧寺下に相当する。同地点では、明治三六年火災比定の焼土層下、近世遺構↓中世の敷地区画では、五輪塔地輪を転用した可能性のある礎石・排水遺構などがある。木簡はさらに下位の径約一mの土壇内よりの出土。室町時代の初めに比定している。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「寺大豆」^{〔二カ〕}斗十二×

・「十一月廿一日

(96)×21×3

9 関係文献

尾道市教育委員会『尾道―一九八二―』(一九八三年)

(森重彰文)

